

○いさむ／いさめる

「いさむ／いさめる」について具体的な考察に入る前に、まず「いさむる」という形について確認しておく。現代語では「いさむ」は五段活用と捉えられており、そこには「いさむる」の形はない。それは下一段活用の「いさめる」でも同様である。森田義興の前掲論文では、「いさむる」は韻律上の理由から「いさむ」の終止形に「る」が付加されたものと説明されている。

他方で、太田登と中井精一は『グローバル天理』(2000年7月号)において、「いさむる」は中世末から近世初頭に一段活用に統合された古い活用である二段活用の残存であると説明している。両者によれば、「おふでさき」では、古い二段活用と新しい五段活用が併用されており、例えば一号11の「そばがいさめバ神もいさむる」の前半の「いさめバ」は五段活用(二段活用であれば「いさむれば」)であり、後半の「いさむる」は二段活用であるとされる。

本稿では、「いさむ」(「つくす」「ゆるす」「わたす」なども含めて)の活用に関して、差し当たって「いさむる」といった特殊形があり、それが自動詞であることを指摘するに留める。もし古いタイプの二段活用であればそれは厳密には連体形であるが、太田・中井が言うように「おふでさき」が現代語の形式も取り入れているのなら、現代語では終止形(「いさむ」と連体形(「いさむ(こと)」)に活用の区別はなく、森田が言うようにそれを韻律的な付加を伴う終止形として捉えることも可能であろう。

以上をふまえて、自動詞「いさむ」からみていく。まず、格助詞「が」に注目すると、「いさむ」主体は「りうけいが」(一号14)、「そばが」(一号11)、「心が」(七号110、十一号55)、「をやの心が」(十四号59)、「きが」(十二号55、十三号25)と記されている。「が」のマークはないものも含めて、その主体のほとんどが「心」であり、とりわけ「せかいの心」(二号17、三号4、143、四号19、20、35、七号111、十号82)が最も多く、「せかい一れつ心いさむる」(一号7)とも表現されている。他には「上」や「上下」という言葉も用いられており、「上たるハ心いさんでくるほとに」(二号2)や「上たるところいさみくるぞや」(二号4)、「上下ともに心いさむに」(五号67)と記されている。「せかい」や「上下ともに」、あるいは八号69で「どのよなものもいさむばかりや」と歌われているように「いさむ」主体は全称的に示されており、その働きが単に個人に留まらないことが読み取れる。また、「心」は「月日の心」(七号34、十号63)や「をやの心」(十四号59)とも表現され、「神もいさむる」(一号11)のように、「いさむ」が親神の心の作用を示す言葉としても用いられている。

「いさむ」には、「にちへに」(三号143、四号76、七号96、十号18、十一号55、十五号66)、あるいは「だんへと」(一号9、三号4、六号17、十号18、82、十二号19、十五号66)という副詞が頻繁に添えられている。そのことから、「いさむ」ことが一時的なものではなく漸次的なものであること、また、

日常生活の中で生じてくる作用であることが読み取れる。

ところで、「いさむ」は、「○○なら□□」という形式で登場することが多い。まず、「いさむなら□□」のかたちでは、しばしば「せかいの心」が「いさむなら」と記されて、そうすることで、りうけがいさみでる(三号143、十号82)、「にほんのをさまりとなる」(三号4)、「神の心もみないさむなり」(四号20)、「月日にんけんをなじ事やで」(七号111)と示されている。また、「せかいの心」以外では、「だんへと心いさんてくるならバ/せかいよのなかところほんじよ」(一号9)や、「月日にもたしか心がいさむなら/にんけんなるもみなをなし事」(七号110)と説かれて、人の心が「いさむ」ことと神の心が「いさむ」ことが相互関係にあることが示されている。そして、その成果として、農作物(立毛)の実りや、「にほん」の治まり、「ところ」の繁盛などが現れてくると歌われている。

次に、「○○ならいさむ」の形式を見てみると、「せかいの心」が「いさむ」場合は、「かみがでてなにかいさいをとくならバ」(一号7)、「このみちが一寸みえかけた事ならば」(二号17)、「これさいかみなみへきたる事ならば」(四号19)、「しんぢつの神のぞんねんはれたなら」(四号35)と歌われている。二号の「このみち」とは文脈上「神の打ち分け場所」に関連して神が「をもち」に出ようとする「みち」と解され、また、四号の「これ」とは「上の心」に「神の心」をみせることを意味していると考えられるが、いずれにしても一号17にもあるように、神の存在や働きが現れて、それが人間に説かれて、それが分かるようになってくれば「せかいの心」が「いさむ」といえよう。

さらに、「○○ならいさむ」の形式において「上下ともに心いさむ」場合は、「このみちをほりきりとふりぬけたなら」(五号67)と歌われており、ここでの「このみち」とは、「このよふのしんぢつのね」を掘っていく「みち」と考えられる。また、「どのよなものもいさむ」場合は、「このききハたすけ一ぢよにかりたら」(八号69)あるいは「このみちえはやくついたる事ならば」(十二号82)と論されており、前後からここでの「このみち」は親神による「むねのそふぢ」を進めていく「みち」と解される。つまり、「上」も「下」もともに「いさむ」には両者が基づいている根元への了解が求められ、さらに、「どのよなもの」であつても親神によって人々の胸のほりかが払われて「たすけ一ぢよ」に進められていくことによって「いさむ」ことができる。

他方で、「神」が「いさむ」場合には、「みなそろてはやくつとめをするならバ/そばがいさめバ」(一号11)と説かれている。あるいは、「月日の心」が「いさむ」場合には、「これさいかはやくぢうよふみせたなら」(七号34)と歌われており、人々の胸の掃除をして「りやく」(利益)を見せたいことが示されている。最後に、「なにもかも神のをもはくなにへとも/みなといたなら」(四号27)や、「いちれつに神がそふちをするならバ/心いさんてよふきつくめや」(三号54)などでは、その「心」は人とも神とも捉えられると考えられる。